

仁の生涯

＝東洋音楽学校へ＝

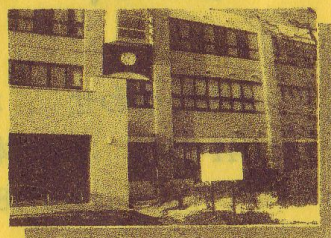
明治37年(1904)、大野村の医師の子として生れた。現在の郷土資料館辺りだ。大野小学校時代、算術は苦手な体操の鉄棒が得意だった。

同校高等科を卒業して東京の電機学校へ入った。誘われて浅草オペラに通い田谷カ三に魅せられ、電機学校をやめ東洋音楽学校に移ってしまった。

声楽は伸びなかったがピアノ科へ転じるとメキメキ上達した。

卒業して音楽家となり、優遇され誇りを強くもった。大正から昭和に掛け数々の業績を残した。

仲間から庶民的で親しみやすく「マーちゃん」と呼ばれた。



現在の母校大野小学校

函館への演奏の合間を縫い大野を訪れ、大野川や観音山を眺め懐かしんでいたという。

昭和41年(1966)、大阪でピアノ指導中急死した(62歳)。

仁の音楽活動

《東京交響楽団常任指揮者》

■大正11年(1922)音楽学校を優秀な卒業生のメンバーに選ばれ、外国航路船に乗り音楽を聴かせる。

■同14年、山田耕筰の日本交響楽協会に入りファゴットの勉強を始める。

■同15年、新交響楽団に加わり、以来17年間首席ファゴット奏者を勤める。指揮法をローゼンシュトックに学ぶ。

■昭和12年(1937)、大野小学校開校60周年記念に母校の校歌を作曲する。

■同17年、東宝映画のオーケストラに入り、東宝(東京)交響楽団の指揮者として頭角を現す。39年まで常任指揮者を勤める。

■同27年、これ以降現代音楽の紹介・日本初演続く。

■同32年、アルゼンチンに招かれ指揮をとる。

■同34年、ソビエトより芸術名誉章受ける。

■同40年、札幌交響楽団定期演奏会の指揮。



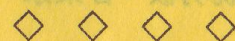
昭和33年(1958)ソ連レニングラードで指揮執る仁と会場

函館での公演

●昭和10年代、木琴・平岡養一、喜劇俳優・益田キートンと上田のピアノで共演(函館巴座)

●同20年代、小牧バレエ団「白鳥の湖」公演・東京交響楽団(東響)指揮(函館松竹座)

●同30年代、函館市で演奏の指揮(新川小、青柳小、中央中など)



○平成16年(2004)、上田のピアノ伴奏曲SP盤紹介(函館FMいるか)

永久名誉指揮者

平成8年(1996)、東響は創立五十周年に「永久名誉指揮者」の称号を上田に贈っている。



昭和34年(1954)仁(右から三人目)が関係者と写す・大野町役場前